

---

## 前奏曲、第 1 番

green age

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

前奏曲、第1番

### 【Nコード】

N0153G

### 【作者名】

green age

### 【あらすじ】

音の中に声がある。そんな不可解なことはあるはずがないのだけれど、たまたま通りかかった音楽室で、何故か「声」が聞こえたから。

音の中に声がある。そんな不可解なことはあるはずがないのだけれど、たまたま通りかかった音楽室で、何故か「声」が聞こえたから私は急いでいた足をはたと止めて、その声に耳を傾けた。不思議なその声は、私の体に見えない糸を巻きつけて引つ張るかのようになり、私の足先は無意識に音楽室の古びた扉へと方向を変える。本当は担任から呼び出されていたのだけど、私はその声が聴こえてくる音楽室に立ち寄ることにする。

野球部の声が盛大に響く放課後はなんだか切ない。

誰もいない校舎というものはただの空っぽの箱であり、たまに廊下を今日にくたびれた生徒や教師が行き交うだけ。てっぺんまで昇った太陽は私たちを見渡して、また下り、その太陽を名残惜しく感じるように私たちの背中には猫背になる。青い空が太陽の光を飲み込んでオレンジ色に染まる。その上から藍色がオレンジ色を飲み込みもうとする。今日が終わって、夜がやって来る。

朝には聞こえなかった自分の足音は何かを追いつめるがごとく鳴り響き、擦れたスリッパの音はゆっくり歩いていても急かしい。

いつもなら友達を誘ってさっさと窮屈な学校から脱出するのに、今日は私だけが居残りだった。たまった数学の宿題が吐きそうなほどある。それを提出するまでは帰さない、と神経質な口調で担任は言う。担任が数学担当だったから甘く見ていた。だが皆が毎日こつこつと積み上げてきた時間が今まとめてやってきたようなものだ。私は我慢して、というよりもすでに問題を解くよりも解答を写しながらさっさとそれをやり終えた。不真面目人間だなんて承知のこと、私はプリントの束を半分握り締めるように廊下を進んだ。

職員室までは二階分下へ下がらなければいけない。最高学年になるほど上がる教室が今は迷惑千万だ。

誰もいない教室はぽっかり空いた穴のようで、私はそれを横目に廊下を渡る。人がぎっしり詰まる廊下も教室もそれが無くなるだけで役割を担わなくなる。床の上に並ぶ机も椅子も、人が座らなければただの物だ。役割がなくなると、物は眠る。昼間の私たちの声や、体温や、ぶつかった傷などを吸収し、何を語り合うわけでもなくクラスの数分に溢れた「物」たちが、明日の私たちの声を待ってひっそりとした存在だけを残す。

物も、人と同じように眠って夜を越えるのね　窓のサッシを指でなぞりながら、その冷たさに体を硬くした。

窓の外では部活生が声をあげながら練習に打ち込んでいる。オレンジ色のボールが落ちてきたように、体操服やユニフォームは色が染まり、泥んこになっている。駒のように動く部活生の姿を見ながら、「放課後」という別空間に目蓋を震わせた。長い廊下、汚れた壁、天井、深く呼吸をするように私を包み込む。

三年分の思い出を吸い込んだぼろぼろのスリッパが音を立ててまた一步を踏み出したとき、ふと遠くから音が聴こえた。私の足音の方が大きいくらい細かい音、私は耳を澄まして足を止めた。

今日は吹奏楽部は休みのはずだ。音が聴こえてくるはずがない。だけれどか細く鳴るその音はたったひとつ。

…ピアノ？

私は一階下にある音楽室に向かって歩を早める。

音楽室の扉の向こうから、確かに聴こえてくるのはピアノの音。その音に不思議と吸い込まれるようにここにやって来た。音楽室の扉の窓は半透明、中ははっきりと見えない。でも灰色の人影が体を揺らしているくらいは確認が出来る。まだ太陽の残る夕方とはいえ、誰もいない学校の中、音楽室、もしかして明日には学校の七不思議なんてものが出回り始めるかもしれない。なんて冗談を曖昧に濁し

たまま、まだ鳴り続ける音に私は息を飲みながら。

そこだけが切り取ったように古い、音楽室の扉をそつと開けてみた。扉を挟んでいた内と外の空気がぶつかり合うように混ざり合っている。少しずつ開いていく隙間を覗くように中を恐る恐る確認してみると、その中にいた人物に目を二、三度瞬かせた。

「……あれ？」

驚いて身を隠すように、ぴたりと音が止む。

扉開けた瞬間に流れ込んできた大量の音の渦は、紐を千切るようにいとも簡単にぶつりと切れる。私が素っ頓狂な声を出したからだ。音が瞬間で消えた部屋の中は、震えた空気が膨張しているように思えて、猫のように身を強張らせ、緊張の糸を張っていた音がこちらを伺うように音を止めたまま、澄んだ眼差しでこちらを見ているような気がした。

しかし私は音が止まった今でも、古ぼけた教室内で不自然にある、磨かれた漆黒のグランドピアノに向かっていている青年に釘付けになっていた。

「高安くん……だよね？」

「木原さん」

高安くんも驚いた顔をしながら、屋根皿の隙間の三角形から私の姿を確認し、切れ長の瞳を瞬かせた。

私は声を無くしたまま、ただ高安くんの姿を見つめた。喉から出てくる言葉はきつと驚きの色にしか染まらない。それは高安くんがピアノを弾いていた正体といっても頷けないからだ。本当はどこかにさっきまでピアノを弾いていた人が隠れているのではないかと疑うほど。それくらい高安くんはピアノが似合わない。こんな繊細な楽器が似合う身なりでもない。

高安くんはそんな私の気持ちを察しているかのように、照れくさそうに微笑んだ。

高安くんとはピアノが結びつかないのは、何よりも高安くんが私たちの高校の剣道部の主将でもあるからだ。剣道部は私たちの学校の中でも一、二を争うほど厳しい強化部として優遇されていて、高校受験の際には剣道部専用の推薦もある。高安くんがそれを受けたかどうかは知らないが、それでも今、高安くんはその部の頂点にいる。私は驚きやら何やらを飲み込んで、真っ先に聞いた。

「今日、部活は？」

「ああ、今日は昨日の総体関係で休み」

「剣道部に休みなんてあるんだ」

「そりゃあね」

朝も早くから、放課後も夜遅くまで毎日が練習、そして地獄のような合宿に全国規模の遠征、剣道部の話を聞いただけで血反吐が出そうだが、その分それに耐えることの出来る人しか残らない。それにそれを知った上で高校を受験する人もいるのだから、面倒なことが嫌いな私にはその考えが全くと言っていいほど理解が出来ない。私たちの高校の名前を聞いただけで真っ先に剣道部が思い浮かぶくらいなのだ、全国から選りすぐられた腕鳴る連中がここに集まる。

しかしそんな人びとの中で、特に高安くんは目立つ存在でもあった。背は高いが、体の線は細く、特に筋肉がありそうでもない。切れ長の瞳は教室にいれば優しそうな弓張り月の形であるし、声色も、言葉遣いも高校生特有の刺々しさがないと思う。いつもやんわりとした丸い雰囲気や背中に背負い、むしろその背中にいつも担いでいる大きな剣道部専用のスポーツバッグや竹刀袋に納められた竹刀が似合わないくらいだ。

それでも高安くんは部内で一番強いのだという噂はよく聞いていた。部内を統括する存在であるのだから、それも当然かもしれない。だからこそ尚更、私は目を白黒させた。

「高安くん、ピアノ弾けるんだ？」

恐る恐る、高安くん領域に踏み入るように聞いてみる。そこにはたくさんの地雷が埋まっているかもしれないから、大丈夫かな、と思えるだけの領域まで。しかし高安くんはそう聞かれるのが慣れているかのように微笑んだ。瞳が弓張り月に歪む。

「少しだけね」

「小さい頃習ってたとか？」

「うん、本当に少しだけ」

高安くんはピアノから離れて、譜面台の曲線を手のひらでなぞった。スポーツをしている部活生特有の、ごつごつした大きなその手になぞられるその行為は柔らかく、思わず目を見張る。高安くんの目は愛おしそうにピアノを見つめていた。愛撫するように、抱き締めるように、マメだらけの指を漆黒に吸い付かせるように。だけどその合間から目を凝らすと見えるのは、このピアノのように漆黒な色をしたもの。透明な水に黒いインクを一滴落としたように、ゆらりゆらりと底に沈んでいくもの。

ふと、高安くんの瞳はゆつくりとこちらに向けられ、私の足は反射的に一歩後ろに下がった。

「木原さんは何……宿題？」

「あ、うん。たまってたやつ」

「それにしてもまたすごい量だな」

高安くんは今度、歯を見せて笑った。いきなりそんな顔されたものだから、目を凝らした瞳が焦点を失って、気持ちが戦ってしまう。

私はその大量のプリントを隠すように背中にし、高安くんを噛み付くように言った。

「高安くんは宿題ためないの？」

「ちゃんと毎日やってるよ」

「部活があるのに？」

「当然だろ」

今度は余裕をたっぷり含ませて微笑まれ、同級生であるのにお兄さん気取りされてるみたいで、言葉を変えれば子供扱いされてるみた

いで私は俯く。同じ年なのにこうして優等生ぶりを見せ付けられるとかえって自分が哀れに思える。高安くんが真面目な奴だとは知っていたから、聞いた自分にも非があるのだけど。

大体、こんな質問しなくてもいいはずなのに、私はさっきから気持ちばかりが焦っていた。それに代わって高安くんの落ち着いたその表情は何かを見据えているみたいで怖い。

唯々プリントを握る手に汗が滲む。その感触はなんとも気持ちが悪い。しかし一瞬無言になった私たちの間に野球部の声がひとつ走り、続いてバットに球が当たった軽快な音がそれを追いかけて、そのボールの放物線を目の前で見ているかのように私たちは宙に視線を泳がせ、高安くんが先に口を開いた。

「木原さんは今何組？」

高安くんはピアノに背を預けて、腕組みをしながらこちらを向いた。夕日のオレンジ色は高安くんの背中を染めている。だから顔には影が落ち、笑顔に重みが増した。

「四組だよ」

「そっか」

「高安くんは？」

「俺は八組」

知らなかったわけでもないけれど、何となく聞いてみたその答えに心が萎れる。

私と高安くんは去年まで一緒のクラスだった。特に何かを話す関係ではなかったけれど、ただ、たまに席が近くなったら会話を交わす程度ではあった。高安くんは剣道部ってだけでも目立っていたし、成績も良くて先生からも特に気に入られていたから。その反対で落ちこぼれている私は高安くんとは真逆の世界にいて、だからほとんど興味本位で私から話しかけていたに過ぎない。だけど高安くんはそんな私のあれやこれやの質問にも丁寧に答えてくれたし、授業一分前には一言二言話しかけてくれたりもした。



当たらず触らずの心地よい距離感だったのかもしれない。心の隅では、高安くんに話しかけられる度に何かが潰れて弾ける感覚があった。笑いかけられると鼻の奥がつんと痛んだ。たまに教室内で無意識に高安くんの姿を目で追ったりしていたし、高安くんが休みの日は自分の気持ちちが落ち込んでいるのも知っていた。

しかし今年、私は四組に、高安くんは八組に分かれた。だけど分かれたのはそれだけではない。今の学年の教室は一組から四組までは旧校舎、五組から八組までは新校舎と場所までもが二分されていたのだ。玄関も違うそこは私もまだ足を踏み入れていない。高安くんと会うのも今日が久しぶりだ。

離れると、次第に小さく芽生えていた気持ちも萎れた。目で追うものもない、授業一分前の楽しみもない。だけどそんな芽生えかけの気持ちは環境の変化の大きな風に消えていき、記憶の片隅にまで追いやられた。

だけど今高安くんの姿を見て、記憶がゆっくりと軌道修正をするように戻ってきた。地球を廻る月のように、私の周りを軌道にのって廻りだし、あの頃の少し酸っぱく感じた気持ちと呼び起こさせる。

私は一回大きく瞬きをして、高安くんの姿を見据えた。

「新校舎はどう？」

「そうだな……人が少ない」

「高安くんたちの教室以外、全部旧校舎にあるもんね。不便じゃない？」

「まあ、剣道場は近くなったけど」

高安くんの微笑みに思わずつられた。その途端帳のようなものが解けて、私たちの間には和やかな空気が流れる。

高安くんが元気そうであった。四月、クラス替えの掲示板を見たとき真っ先に高安くんの名前を探して落胆したのを覚えている。特に仲が良かったわけではないのに。落胆する自分の心を奮い立たせるようにその場を後にした。胸の奥に小さな痛みが走って、何かし

らそれを形にすれば良かったと後悔の念が私を責め立てる。でも私は自分に言う　　こんな些細な痛みくらい、すぐに忘れるよ。  
その気持ちは切なくとも。

私を振り向かせようと肩を叩くように蘇る記憶から目をそらすように、私は夕日に眩しいふりをして目を細めた。気持ちを限界いつぱいにまで溢れさせるものを外へ逃がすように、私は深く息を吐いて気持ちを切り替えると、笑う。

「ねえ、ちよっとピアノ弾いてよ」

「えー……」

「ピアノの音につられてここに来たんだよ。サービスしてよ」

私はそこら辺に置いてあったパイプ椅子を無造作に広げると、無理やり観客席を作った。高安くんは照れくさそうにピアノと私を交互に見て頬を染める。形勢逆転、高安くんはもたれていた背中を離すと、渋々ピアノの前に座った。背の高い高安くんがずっとその場に納まる。スポーツに熱心な高安くんのイメージしかないから、やっぱり高安くんとピアノのイメージが上手く結びつかない。

譜面もない前方を見ながら、一瞬間を空けて、高安くんはもう一度私を見る。

「何聴きたい？」

小首を傾げ、澄んだ瞳を観客席に向ける。

「そんなにレパートリーがあるの？」

「一応ね、お客様のご希望をね」

照れくさそうに微笑む高安くんを見て、一瞬、心がぽんと明るくなったように思った。そういえば、高安くんはこういう人だった、優しいだけじゃない、言葉の選択が綺麗な人。そんな丁寧な高安くんは、逆に厳しい剣道部の世界とは縁遠い気がしていたことも。

「うーん……私、わかんないよ、クラシック」

「じゃあ、適当に」

高安くんは一瞬思考をめぐらせて、徐に白鍵に手を添えた。俯いた

瞳に落ちた影、睫毛が長いなとふと私は思った。その間は一瞬、高安さんの口元から溜息のような細い息が吐かれて、教室内は静寂が支配した。外から聞こえてくる声も、音も、何か声を潜めて、高安くんが一音目を踏み出すのを待っているかのように。私の背中にも緊張が走って、思わずしゃんと背筋を伸ばした。

それは、音楽の授業やテレビを通して聴いたことのある有名なクラシックのような劇的な始まりをするのかと思ったら、たくさんの鍵の中から迷い無くぽんと一音が打たれて、余韻が響く中そこから静かに、空気のような間を置いて音が動き出す。

漆黒の屋根に映った弦と駒が指の動きと重なって滑っていく。ペダルを踏む音が小さく、たまに大きく地面に轟いて。そこから流れ出すメロディ静かに、たまに微かな高揚をつけながらこの部屋いっぱいに響く。白い鍵盤に吸い付くように手のひらが右へ左へ走る。五本の指が音を求めて走り回る。激しい曲ではないのに、その繊細な指の動きは音の深さを奏でていく。

私は屋根皿の隙間から見える高安くんを見つめた。高安くんはきつく眉をしかめて、なのに悲しくその表情を曇らせていた。鍵盤の上を動く度に揺れる前髪が小刻みに震えている。

私はどうしてもこの音に居た堪れなくなつて、ゆっくりと目を閉じた。

私はピアノを習ったことがないし、クラシック音楽も滅多に聴かない。だから感覚的にしか感じる事が出来ないけれど、耳の奥を突き刺すような音に思わずびくりと眉根が動いた。高安くんが奏でる音は時折滑稽なリズムを刻みながら。だけどたまに小さく消えそうに、触れたら壊れそうなほどその音は切なく優しい。

私は目を閉じながら思考をめぐらせた。

高安くんの指の動きに、少しの躊躇いがある。そこから溢れそうな感情。平均律の響き。C11、Am69、Cm9、音が重なる。刹

那の重低音に針のような高音。

さつき音楽室の外で聴こえた音とは明らかに違うものの、その旋律の隙間にさつきと同じ声が聴こえる。私はよく耳を澄ませた。確かに音のリズムは綺麗に、きつちりと刻まれているのに、胸を引っ掻くようなものがき苦しむ叫びが、途方にくれ、俯きながらひたすら道をさ迷い歩いている心の乱れが見える。悲しみを表現するならば言葉にだって出来る。だけどそれ以上の、この胸に渦巻くこの瞬間を表現出来るもの、それは音という形のないものに乗る。

音は空気を伝わり、震わせ、そして私の耳から入り込み、すっぱりと私の胸の内におさまり、悲しみを誘う。その手は私の心の中の思いの箱をひとつひとつ開き、同じ種類の悲しみを引っ張りだそうとしている。

心の奥が騒ぎ出す前に、私は再び瞳を開いた。曲が終わっていた、否、唐突に止められたからだ。

「……高安くん」

「……」

高安くんの姿が見えない。椅子から立ち上がると、高安くんの丸まった大きな背中が見えた。高安くんは体を震わせながら俯いている。鍵盤に顔をくつつけるように、そのマメだらけの手のひらに顔を突っ込んで。喉の奥から搾り出されたような枯れた嗚咽が、まだピアノの音の余韻が残る教室に微かに響く。

誰かの悲しみというものが、他人には理解出来ない悲しみというものが、苦しみが、胸を抉る切なさ、それを隠そうとする優しさが、大きなものを背負った痛みが、潰されても、踏みにじられても、もがき苦しむことしか出来ない弱さが。心つてものは可哀想に、きつとみんな同じ形であるのに、主人の思いの違いだけで形を変える。高安くんの心の形はどんな形だろう。たくさんの重圧に屈しそうな心と、期待に応えようという自分に敵しすぎる意志でボロボロに崩

れ落ちているのかもしれない。もう片羽もがれているのかもしれない。

獣しかいないここは修羅のような世界であり、本当にこの世界に救われる心などはあるのだろうか？ だけど伸ばした手に、たとえ偽善だと言われようとも、誰かを救いたいという心も確かにあるのだ。

ウィルスのワクチンのように、難問の答えのように、対になったそれに人間がなっただけでおかしくないでしょう。

不器用でも、何もわからなくとも、ただ側にいるだけでも、それでも君の救いになりたいなんて。疲れきった心をすくいあげて、羽根を休める手のひらになっただけでいいなんて。

「木原さん」

「うん」

高安くんは近づいた私にしがみつこうように腕を回した。嗚咽が私の制服にこもる。

この細い肩に一体いくつの錘が押し掛かっているのだと思うと、声も出ない。ただ毎日黙々と押し殺され続けた心が奥深くから浮かび上がる。制服の袖から出ている高安くんの腕を見ると、むき出されたそれには様々な形の傷が無数に刻まれていた。息を飲む心地で目を細める。その傷の数だけ現状を耐えようともがく高安くんの姿があることを。ひとつひとつが魂を持って、高安くんの心を少しずつ削っていつていることを。

私は高安くんの頭に手を回して、しっかりと胸に押し付けた。高安くんの心を縛り付けるものを溶かすように、もう消えることがなくとも、その傷が治るように、強く、強く。

高安くんもそれに答えるように、腕の力を強めた。

「素敵な曲だった」

「即興で作った」

「すごいね」

「昔ピアノリストになりたかったから」

「……そう」

「木原さんを想って、弾いた」

高安くんはまた私の胸に顔を埋めた。丸まった背中を撫でれば、痙攣して揺れる体が少しずつ落ち着いてくる。

高安くんの嗚咽の混じる空気を飲み込むように大きく息を吸い込むと、そんな事実を消し去るように大きく息を吐いた。その間で、藍色に染まった空が窓から見えた。一番星がダイヤモンドのようにきらりと輝く。夜は光を覆い隠して私たちに悲しみや不安や絶望をもたらそうとするけれど、見上げた夜空に散りばめられた星たちが、自らの存在を示すように輝いている。零れ落ちそうな光を空にとどめたまま、私たちの代わりにじっと涙を耐えている。

息も出来ぬほどの深海から浮かびあがって、空気を吸ったここはどこだろう。綺麗な景色は見えますか？思った以上に汚いですか？それでもきつと再び深海に戻ってしまう君を、私はここで待っているよ。

「なれるよ」

「素敵な曲だったから」

この細長い指の理由も、似合わないこのグランドピアノの前にいることも、私はもうこれ以上何も言わない。

高安くんは返事をしなかった。私はもしかすると余計に彼の肩に重圧を押し付けたかもしれない。それでもこの世界に正答があるなんて数字の中の話でしょう。私たちは一對一の人間だから、道徳も何も通用しない領域があるのです。

どちらからともなくキスをした。それはまるで何かに誓うように、そして何かを溶かして、丸く柔らかく形を整えていくように。

高安くんは次の日、剣道部を辞めた。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0153g/>

---

前奏曲、第1番

2010年10月9日13時39分発行